

# 中学生の喫煙に対する意識と喫煙防止教育の進め方について

～喫煙についてのアンケート調査をもとに～

山口 大地 (生涯スポーツ学科 学校スポーツコース)

教員指導 谷川 尚己

キーワード：中学生，喫煙防止教育，意識調査

## 1 緒言

喫煙者の多くはタバコの害を十分に認識しないまま、未成年のうちに喫煙を開始している。また、タバコに含まれるニコチンには依存性があり、自分の意志だけでは、やめたくてもやめられず、禁煙を始めても長期間継続することが難しいことが報告されている。18歳未満での習慣的喫煙開始者は、18歳以上での習慣的喫煙開始者に比べて、1日の喫煙本数、ニコチン依存度が有意に高く、中学校3年生から高校卒業までの間に喫煙を開始する者が8割以上を占めることが報告されていることから、中学校3年生までの児童・生徒に対する効果的な喫煙防止活動の実施が重要であると考えられる。

今回、中学生に対して、喫煙に関する意識調査を行い、喫煙の害に関する認識と喫煙防止教育の経験についての関係性を検討し、喫煙防止教育のあり方について報告する。

## 2 研究方法

喫煙防止教育を受講した中学生728人を対象に喫煙に関する11項目のアンケート調査(無記名)を実施した。

## 3 結果と考察

中学生を対象として喫煙についてのアンケートを実施した結果、たばこについて良い印象を持っている生徒は少ないことが分かった。また、他人や家族が吸っているたばこの煙が嫌だと答えた生徒も多かった。しかし一方で、たばこを友達からすすめられたことがあるやたばこを吸っていると答えた生徒もあり、簡単にたばこを入手し吸うきっかけ

があることもわかった。また、「たばこは身体に悪いと思いますか」の質問に対して、そう思うと答えた生徒はおよそ97%に及んだにも関わらず、「他人からの煙はあなたに有害ですか」の質問にそう思わないと答えた生徒が2割もいたことに驚いた。このことから、受動喫煙の危険性もしっかりと伝えなければいけないと考える。

「たばこを友達からすすめられたことはありますか」では、あると答えた生徒が三年生の男子に多いということが分かり、たばこに手を出させない働きかけが学校現場で必要であると考えられる。

## 4 まとめ

未成年者の喫煙を防止するための教育は、学校の場において充実するとともに、地域、家庭においても積極的に推進し、社会全体の中で幅広く喫煙を防止する環境を形成するべきである。さらに、母性保護の観点からの健康教育も推進するべきである。

学校教育においては、喫煙防止教育をより早期から行えるよう、そのための教材の整備、指導者の研修等の環境づくりも推進するべきである。

## 引用・参考文献

- ・文部科学省(2005) 喫煙防止教育等の推進について
- ・中尾理恵子等(2007)「未成年期に喫煙開始した若者の喫煙に関する認識とニコチン依存度—大学生の質問紙調査から—」長崎大学大学院医歯学総合研究科保健学専攻